慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人最初の印度支那半島横断(一)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.68- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本人最初の印度支那半島横斷（一）

最近古本屋で、鋏脚岩本千綱と云ふ人の「暹羅、老撾、安南三國探檢實記」と云ふ明治卅年博文館出版の菊版一九二頁ばかりの書を入手した。岩本と云ふ人は土佐の人、藩立海南學校を出で、佛蘭西學を修め、陸軍幼年學校を經て、陸軍士官學校に入り軍人となり北越新發田にあつたが明治廿年保安條例に觸れて東京を追はれた一政客と舊交を溫めたかどで停職され、翌年東京に出で遂に南洋に遊び、日暹間の通商、及び日本農民のシアム殖民に就て盡力し、日暹間を屢々往復し、然も事ならずして皆失敗し、遂に方向を轉じ、明治廿九年に印度支那內地視察の計畫をたてた。然しながら旅費なき爲剃髮して僧となり、山本鋲介なる名古屋の生れで明治廿年シアムに來り同國貴族學校に入り文學言語を學びたる人と同行して同年十二月二十日バンコックを發し、徒步北進した。當時印度支那半島の內地跋涉は數十人の護衞と萬般の準備とを整へ行くを要し、シアム人もその行の困難を豫想して阻止せんとし、二人は遂に密かに都門を離れ、托鉢行脚の途についたのである。山本氏の此の行に參加したのは高岳親王の崩御地羅越を老撾となすの俗說に誤られ、ラオス方面に其の遺跡を搜索せんとしたためであり、二人が僧體となつたのは佛敎の行はれる地方とて僧侶款待の風あることを知つてゐたためである、極めて冒險的な旅行であり、都々一を唱つて土人の爲に病魔攘除の祈禱をなしたり、盜賊にあつて行囊を奪はれたり、或ひは山賊の家に宿し、或ひは虎に襲はれ、種々の珍談續出して頗る小說的興味が多いが實地體驗とて中には土人の人情、地方官の態度などを窺ひ得られる面白い資料がある。道筋はコラットを經、チョナボット、ノンカイを過ぎ、國境を越えて佛領ラオスに入り、一月廿三日ウエンチャンに達し、山路を橫切つて二月十九日にルアンプラバンに入り、舊王に拜謁し、また高岳親王の遺跡に就て總督やラオスの高官に意見を問ひ、種々調査したるも結局得る所なく、廿四日此處を發し、險路を越えてムアン・ソン、ムアン・カウを經、東京に入りムアン・サイを過ぎバンブーより舟行ショボー通過河內に四月九日に到着してをる。記事中興味あるは其のシアムの風土民俗に對する記述（六一—七七）、ラオス人（一八三—一八九）、ラオス山中居住のメヤウ人（一三四—一三六）、カー人（一〇七）、タイ人（一六二—一六三）の民俗に就ての觀察であり、殊にタイ人の結婚に際しての男女の擬戰の模樣を面白く描寫してをる（一五〇—一五五）（一五六頁に續く）。